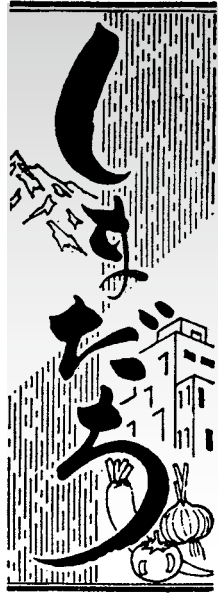




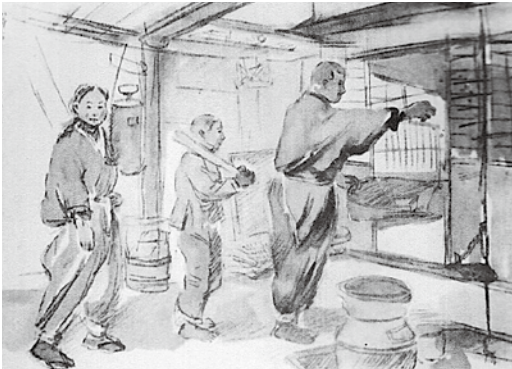
2月3日は節分の豆撒き、中央保育園でもこの日園児たちの豆撒き会が行われました。

園児たちは園長先生の節分のお話を聞いた後、自分たちが作った鬼のお面をつけ、鬼の出るのを待ち受けています。

先生方は「力一杯撒くのだよ」と園児を激励しながら園



平成 28 年 3 月 1 日現在	世帯数	2,840 世帯
	男	3,447 人
	女	3,583 人
	総人口	7,030 人



鬼の三宝に炒り豆を配りました。

暫くすると大きな赤鬼・青鬼が太い棍棒をかざしながら暴れ込んで来ました。元気な男の子たちは力一杯鬼に豆を叩きつけ、中には自分ももらった豆を全部撒いてしまつて床にこぼれた豆を拾って投げている子もあり、鬼は痛いので暴れながら逃げ回りま

ちを叩きつけられて痛みをこらえきれず、急ぎ足で逃げ出し、この日の豆撒きの会は無事に終わりました。

節分の豆撒きは現在残っている数少ない古くからの年中行事の一つです。古く立春の前夜宮中で行われていた悪

焙烙で金火箸を使って炒つた大豆を枡に入れて神棚に供えたものを、年男か一家の主人が、「恵比寿大黒福の神、鬼は外、福は内」と大声で3回唱えながら撒くと後ろに続く搦粉木を担いだ人が「ごもつとも。ごもつとも」と合

わせます。

神棚の前から屋敷の物置・畜舎まで隈なく撒き終ると家族皆でお茶を飲みながら枡の豆を年の数だけ掴みます。子供なら2〜3回で掴めるので、ちよつと楽しいゲームでしたが、大人が40〜50粒を一回で正確に拾うのは難しい相談です。こうした節分の行事は高度成長期あたりを境に豆撒き以外は農村でも廃れてしまいました。

「地域包括ケアシステム」聞き慣れない言葉ですが、皆さんご存知でしょうか？高齢化が進み様々な問題が予測される中で、現在、行政が各地域に合った誰もが、地域で安

心して暮らし続けることができる仕組みを整備しており、それが「地域包括ケアシステム」です。

講師のお2人からは、松本市での「医療」「介護」「地域」の連動の必要性と私達住民のかかわり方のヒントを頂きました。

平成28年2月22日 島立地区福祉ひろばに於いて、60名近い出席者の中「福祉と健康を語るつどい」が開催されました。

講師には、松本市役所高齢福祉課 萩上補佐と、松本大学 尻無浜教授をお招きしました。

「地域包括ケアシステム」

「一人暮らしの増加 7416% 158%」
 「認知症高齢者の増加」
 「入院期間の短縮」
 「介護の担い手不足 少子高齢化」

「福祉と健康を語るつどい」



「地域包括ケアシステム」はその仕組み自体はまだまだこれから構築されていくものではあります。私達が、住みなれたこの土地で、安心して自分らしい暮らしを続ける為に「お互いさま」「向こう3軒両隣り」「自分達の健康は自分達で守る」地域に根ざしたこの精神を実行し、まずは私達に出来る事から取り組んでみようではありませんか。

心して暮らし続けることができる仕組みを整備しており、それが「地域包括ケアシステム」です。

講師のお2人からは、松本市での「医療」「介護」「地域」の連動の必要性と私達住民のかかわり方のヒントを頂きました。

第十分団一部の そば会

1月17日の夕方、荒井公民館にて荒井・堀米地区の現役消防団員と班長以上を歴任したOBによる「そば会」が行われました。この会は平成5年から続いており以前は現役団員の妻子も参加して行っていました。OBの数も増えたこともあり昨年より前記の通りとなりました。

「まとい会」の名称でOBは現役団員を支援しています。その感謝の意を表す会との位置付けで現役が蕎麦と料理でもてなします。

現役団員は昼過ぎに集合。先輩団員が後輩に指導し蕎麦粉のみと鶏卵一個で伝統の蕎麦を打ちました。

定刻となり来賓の両町会長、地元選出市議を交え開会。団員の打った蕎麦、モツ煮をいただき、酒を酌み交わして大盛況な交流会となりました。



ありがとうは 奇跡の言葉



島立地区は、「あいさつ・声かけ運動」を全住民挙げて推進しています。その実践講座が2月28日(日)荒井公民館に「NPO法人江戸しぐさ」伝承普及員の滝川道子先生を講師に迎え開催されました。

【なぜ、あいさつするの】
「ありがとう」は最も美しい言葉
「ごめんなさい」は成長のステップについて講演、中でも「心を結ぶ慈しみのまなざし」では、声かけの「世辞」が江戸町民の円滑な生活を促し、いざこざを回避する知恵であると説明されました。

日本人は生来「惻隱の情」を備えており、江戸が日本の中心となり諸国から多数の人が集まる状況で、互いに助け合い生活する知恵「江戸しぐさ」を習得したとのこと。
普段何気なく交わす挨拶の意味について改めて考えてみる良い機会となりました。

まつもと鍋講習会

2月4日(木)、島立公民館にて「信州・まつもと鍋」の地域交流会(出張料理教室)が、総勢約30名の参加で行われました。

「信州・まつもと鍋」は、松本大学・白戸ゼミの学生やJA松本ハイランド、松本市農政課などの共同チームが開発したものです。松本一本ねぎ、長芋、ゴボウ、リンゴ、信州SPF豚、信州みそなど、松本市や近郊の食材をふんだんに使います。最初にねぎを焼く(うまみがアップ)、長芋やリンゴは栄養価の高い皮ごと使う、などもポイントです。長芋のひげ根は、コンロであぶって焼き切ります。リンゴはすりおろしてポン酢に加えます(新鮮な味!)。

皆さんが手際よく調理されたため鍋はあっという間に完成し、最後の雑炊までおいしくいただきました。



雛祭り と押絵雛



雛祭りは和暦の五節句

上巳(じょうし)の節句に女子の健やかな成長を祈る行事として行われ、平安時代に紙の人形(ひな)を川へ流し厄払いをした流し雛と、宮中のひいな遊びが合わさり、室町時代になると人形は立派になり飾るものになりました。

江戸時代には一生の災厄を身代わりさせる祭礼的な意味から豪華になり、武家社会の嫁入り道具に加わったようです。江戸後期には有職雛、古今雛等が作られ、宮中の婚礼行事を表す七段飾り、御殿飾りなどが幕末までにできました。近年は住宅事情もあり小型の三段飾りやアートの雛飾りも多く作られています。

押絵雛は文政8年「押絵早稽古」が刊行され全国に広まり、松本でも天保年間から北深志の武家の奥さんが錦絵などをもとにして作り、南深志の商家が売り歩いたそうです。内裏、金時等もありましたが価格が安いために需要があったとのこと。
明治20年から30年ごろが生産のピークで高砂町は大変な雑踏を呈したそうです。しかし北深志の大火や近代的な座雛が流通したりして明治の終わりころ製作が途絶えました。現在は松本で唯一ベラミ人形店が昭和23年から製作しています。

